

生活をよりよくしようとする能力と態度をはぐくむ

家庭、技術・家庭科の学習指導

家庭、技術・家庭科研究会議

太田 ひとみ¹

林 敦子²

金田 玉恵³

瀧 晴奈⁴

要 約

平成 16 年度に実施された「音楽等質問紙調査（家庭科、技術・家庭科）」¹⁾（国立教育政策研究所）によると、家庭、技術・家庭科の学習の必要性を多くの児童生徒が肯定的にとらえている。また、「家庭科、技術・家庭科の学習をすれば、自分の普段の生活に役立つと思う」と答えた子どもたちの割合も高い。その一方で「学習に興味をもったことについて、もっと調べてみたいか」との質問には、否定的な傾向が見られる。学習に対する意識は高いのに、学習したことをさらに深めようと思わない理由は何か。ここに、家庭、技術・家庭科の学習を生かし、生活をよりよくしようとしていない子どもたちの実態が見える。それは、どのようなことが原因か、学習指導のあり方について、改めて考えてみる必要があると感じた。

本研究会議では、「生活をよりよくしようとする」とは、子どもたちが「自分の生活の課題に気づき、解決のために進んで実践しようする」ことととらえた。この能力と態度をはぐくむためには、実践的・体験的な学習活動や問題解決的な学習を充実させることが有効であると考え、授業を行い検証した。その結果、様々な「ひと・こと・もの」とかかわり、五感や感性にふれる実践的・体験的な学習活動を充実させることや子どもたちの身近な家庭生活と関連させた問題解決的な学習の充実が、子どもたちに学習の意義を実感させ、生活をよりよくしようとする思いを引き出し、育てたい能力と態度の育成につながるということがわかった。

キーワード：生活をよりよくしようとする能力と態度、実践的・体験的な学習活動、問題解決的な学習

I 主題設定の理由・・・・・・・・・・・・・98	4 研究の方法・・・・・・・・・・・・・100
1 はじめに・・・・・・・・・・・・・98	5 「生活をよりよくしようとする能力と
2 子どもたちの実態・・・・・・・・・・・・・98	態度をはぐくむ」学習指導の工夫・・・・101
3 家庭、技術・家庭科の課題・・・・・・・・・・98	6 検証授業の実際と考察・・・・・・・・・・102
II 研究の内容・・・・・・・・・・・・・99	III 研究のまとめ
1 研究の目的・・・・・・・・・・・・・99	1 研究から見てきたこと・・・・・・・・・・108
2 研究の仮説・・・・・・・・・・・・・100	2 今後の課題・・・・・・・・・・・・・111
3 用語の説明・・・・・・・・・・・・・100	参考文献・指導助言者・・・・・・・・・・112

¹川崎市立西中原中学校教諭（長期研究員）

²川崎市立藤崎小学校教諭（研究員）

³川崎市立古市場小学校教諭（研究員）

⁴川崎市立野川中学校教諭（研究員）

I 主題設定の理由

1 はじめに

家庭、技術・家庭科の学習は、家庭生活を主な学習対象としている。現在、少子化や科学技術の発展にともない、子どもたちがおかれている生活環境や家庭の価値観も多様になってきている。そのことは子どもたちの生活経験や意識にも反映され、家庭生活を学習の対象としている家庭、技術・家庭科を学ぶ姿勢や、学習意欲にも表れていると感じる。例えば、家庭生活の中から問題を取り上げるとき、問題のとらえ方が各家庭により様々であるため、子どもたち自身がその問題を実感としてとらえることに大きな差が見られることがある。また、授業を通してできるようになったことやわかったことがあっても、自分から生活に役立てようとはせず、例えばボタンがとれた衣服をそのまま着ていたり、身の回りの物が使ったままの状態でごちゃごちゃにほうり出されたりしている光景をよく目にする。

自分の家庭生活をよりよくしようとすることを目的に、家庭実践を授業でも行うなどの工夫をしている。しかし、授業の場を離れると、なぜ、子どもたちの意識は実生活の場での実践や改善に結びついていかないのだろうか。これまでの学習指導にどのような課題や工夫が必要だったのか疑問をもった。

そこで本研究を始めるにあたり、報告されている調査結果から子どもたちの実態を把握し、その現状を分析することから、研究主題につながる課題を探ることにした。

2 子どもたちの実態

子どもたちは、家庭、技術・家庭科の学習をどのようにとらえ、学んでいるのだろうか。平成16年度に実施された「音楽等質問紙調査（家庭科、技術・家庭科）」¹⁾（国立教育政策研究所）によると、家庭、技術・家庭科の学習の必要性を多くの子どもたちが肯定的にとらえている。また、「家庭科、技術・家庭科の学習をすれば、自分の普段の生活に役立つ」と「思う・そう思う」と答えた子どもたちの割合も高い。その一方で「学習で興味をもったことについて、もっと調べてみたいか」との質問には、否定的な傾向が見られる。

学習内容に対する意識は高いのに、学習したことをさらに深めようと思わない理由は何か。ここに、家庭、技術・家庭科の学習は好きなのに、学んだことを生かし、生活をよりよくしようとしていない子どもたちの実態が見える。その原因と学習指導のあり方について改めて考えてみる必要があると感じた。

3 家庭、技術・家庭科の課題

平成20年1月に中央教育審議会が「小学校、中学校、高等学校及び、特別支援学校の学習指導要領等の改善について」答申した。その中で、家庭、技術・家庭科の課題²⁾として、次のような内容が挙げられた。

¹⁾ 国立教育政策研究所「音楽等質問紙調査」 2004年

²⁾ 中央教育審議会第4期 2008年1月

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び、特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（答申）

「家庭、技術・家庭科の課題」

- ・自己と家庭、家庭と社会のつながりに目を向け、生涯の見通しをもってよりよい生活を追求出来る実践力の育成
- ・家庭の在り方や家族の人間関係、子育てについて学習し、生活における自立とともに、他の人と連携し共に生きるための知識と技術の習得
- ・食育や消費者教育の推進
- ・持続可能な社会の構築の観点から、資源や環境に配慮したライフスタイルの確立とともに、エネルギー資源や森林資源の有効利用など社会で活用される様々な技術を評価・管理できる力の教育を目指した教育の充実
- ・日本のものづくりを支える能力や技術を安全に活用できる力の育成

(平成20年1月 中央教育審議会答申より)

これらの課題を解決するために、工夫し創造できる能力と実践的な態度の育成を重視する観点から内容の改善を図るとの基本方針が示された。改善の基本方針は次の通りである。

「改善の基本方針」 抜粋

- 家庭、技術・家庭科については、その課題を踏まえて、実践的・体験的な学習活動を通して、家族と家庭の役割、生活に必要な衣、食、住、情報、産業等についての基礎的な理解と技能を養うとともに、それらを活用して課題を解決するために工夫し創造できる能力と実践的な態度の育成を一層重視する観点から、その内容の改善を図る。その際、他教科等との関連を図り、社会において子どもたちが自立的に生きる基礎を培うことを特に重視する。

(平成20年1月 中央教育審議会答申より)

改善の基本方針の中でも、「工夫し創造できる能力と実践的な態度の育成を一層重視する」と示されている。本研究のテーマである「生活をよりよくしようとする能力と態度をはぐくむ家庭、技術・家庭科の学習指導」が、これからの家庭、技術・家庭科教育にとって重要なテーマであることがわかる。これらのことを踏まえ、次のように研究主題を設定した。

研究主題

**生活をよりよくしようとする能力と態度をはぐくむ
家庭、技術・家庭科の学習指導**

II 研究内容

1 研究の目的

家庭、技術・家庭科は実践的・体験的な学習活動を通して、知識や技能、生活をよりよくしようとする能力と態度を育てる学習指導を行っている。しかし、これまで報告されている子どもたちの実態調査を見ると、教師のねらいや願いは、十分に子どもたちに伝わっているとはいえない。

家庭、技術・家庭科の授業で取り上げている学習内容についての意義や必要性 (p. 102) を子どもたち自身が、なぜその学習をするのか、自分にとってどうしてその学習が必要なのかということ、実感として理解できていないからではないかと考えた。本研究会議では、生活をよりよくしようとする能力と態度をはぐくむために、どのような実践的・体験的な学習活動や問題解決的な学習を設定したら効果的なのかを検証する。そのためにはどのような学習指導の工夫や具体的な手立てが必要なのかについて、授業を通して探っていききたい。

2 研究の仮説

主題設定の理由を受け、仮説を次のように設定した。

仮説

学習指導の中に、自分の家庭生活を見つめ、実践的・体験的な学習活動や問題解決的な学習を充実させることで、実感を伴った理解ができ、生活をよりよくしようとする能力と態度がはぐくまれる。

仮説をもとに、子どもたちが様々な「ひと・こと・もの」とかかわり、五感や感性にふれる実践的・体験的な学習活動や問題解決的な学習を設定していく。子どもたちが思考・判断しながら家庭、技術・家庭科を学ぶことで、学習の意義を実感させ、生活をよりよくしようとする能力と態度の育成を図っていきたい。

3 用語の説明

(1) 生活をよりよくしようとする事

本研究会議では、「生活をよりよくしようとする事」を子どもたちが「自分の生活の課題に気づき、解決のために進んで実践しようとする事」ととらえた。ここでの課題は、日常の解決すべき問題だけではなく、生活をより楽しく、生き生きとしたものになるようにするための工夫や創造も含んでいる。

(2) 家庭科で考える能力と態度の育成とは

鶴田敦子氏³⁾は、「態度」とは「具体的な学習内容に主体的に到達すること＝能力」を通して育成されるものである³⁾とし、実践的能力や態度を育成する要素として、次の5つの要素を示している。

「実践的能力・態度」を育てる5つの要素

- 1 実践する主体の意思＝児童生徒の意思（志）が尊重されていること
- 2 実際の生活に即していること（リアルな現実の生活であり抽象的な生活でないこと）
- 3 学校の外（家庭・地域など）とのつながりがあること
- 4 学習過程において、身体活動（体験）と知的な認識活動の双方が位置づいていること
- 5 生活を向上させるという視点から、実生活の課題に取り組む場面があること

（『ビジュアル家庭科実践講座アバンセ・理論編』鶴田敦子氏による）

4 研究の方法

(1) 研究の手順

①子どもたちの実態把握

家庭科の学習のはじめに、小・中学校で予備検証授業（2回）を行い、自分の家庭生活を見つめる学習活動を行うことで、子どもたちが自分の家庭をどのようにとらえているのか、子どもたちの家庭観や学習の実態をつかむ。

②生活をよりよくしようとする能力と態度をはぐくむためのモデル図（構想図）の作成（p.101）

仮説をもとに、学習指導のあり方を構造化する。

③仮説の検証

授業実践を通して、生活をよりよくしようとする能力と態度をはぐくむための学習指導方法が有効であるかどうかを検証、分析し考察する。

(2) 生活をよりよくしようとする能力や態度をはぐくむためのモデル図の作成

研究を進めるにあたり、次のような育てたい能力や態度をはぐくむためのモデル図を考えた(図1)。

³⁾ 鶴田敦子『ビジュアル家庭科実践講座アバンセ・理論編』家庭科教育実践講座刊行会 p.92 2008年

授業では、①子どもたちがまず自分の家庭生活を見つめて、②学習の課題となる問題や疑問に気づき、③「生活をよりよくしたい」という思いを引き出し、子どもたちの学習意欲を高めていきたい。それぞれの家庭により生活の様子が違っていても、そこに「自分が存在し生活をしていること」、「これからもそこで生活をしていくことを共通の学習の視点として、学び合いの場面を設定する。実践の方法は違って、思考・判断しながら工夫し、創造をしていく過程の中で、自分なりの価値

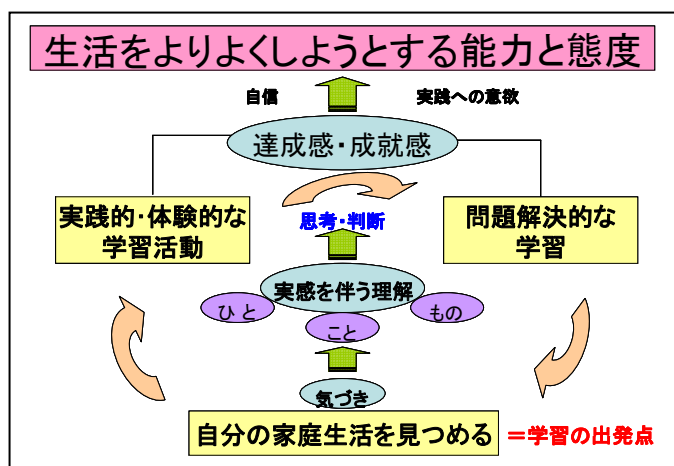


図1 育てたい能力や態度をはぐくむためのモデル図

判断ができ、実生活につながる生活をよりよくしようとする能力と態度の育成をめざす。子どもたちが実生活の場面で生活をよりよくしようとするためには、なぜその学習をするのか、自分にとってなぜその学習が必要なのか、学んだことで自分の家庭生活でどんな変化が期待できるのかを、授業の中で実感として理解できる学習展開と学習指導の工夫が求められる。

(3) 研究の対象

①小学校 家庭科 川崎市立B小学校 第5年B組 33名

「私が作る朝食 ～いためる～」 (8時間構成)

②中学校 技術・家庭科(家庭分野) 川崎市立A中学校 第1年A組 36名

「自分の成長と家族や家庭生活とのかかわり」 (6時間構成)

検証する学習題材については、それぞれの研究員の学校の指導計画をもとにしているため、予備検証授業以外は小学校と中学校の関連性はない。ただし、検証授業を行う際に、次のような学習指導の工夫を検証授業の視点として授業の構想を立てた。

5 「生活をよりよくしようとする能力と態度をはぐくむ」学習指導の工夫⁴⁾

生活をよりよくしようとする能力と態度をはぐくむためには、育てたい能力や態度をはぐくむためのモデル図(p.101 図1)で取り上げた、(1)実践的・体験的な学習活動の充実、(2)問題解決的な学習の充実、(3)実感を伴う理解につなげるという3点において、次のような学習指導の工夫が必要であると考えた。

(1) 実践的・体験的な学習活動の充実

家庭、技術・家庭科では、これまでも学習指導の中で実践的・体験的な学習活動を重視してきた。実践的・体験的な学習活動を充実させることで、仕事の楽しさや、自分でできたという達成感・成就感が生まれ、家庭実践への意欲がもてるようになると思う。さらに実践的・体験的な学習活動を充実させるためには、「気づき」、「驚き」、「喜び」などの感性や、五感を使って感覚に訴える学習活動を大切

⁴⁾ 授業改善の視点をもつにあたり、次の著書および先行研究の成果を参考にした。

- ・ 堀内かおる編著『家庭科再発見』～気づきから学びがはじまる～第6節授業づくりのヒント pp.87～88 2006年
- ・ 2004年 川崎市総合教育センター「研究紀要」第18号
「生活者としての実践力を育てる家庭、技術・家庭科の学習」 p.125
- ・ 2006年 川崎市総合教育センター「研究紀要」第20号
「関心・意欲・態度」を育てる家庭、技術・家庭科の学習指導 p.97

にした学習指導を工夫することが大切である。

(2) 問題解決的な学習の充実

将来にわたって変化し続ける社会に主体的に対応していくためには、問題解決能力をもつことが、必要である。問題解決能力には、思考力・判断力・表現力等があげられる。これらの能力の育成のためには、問題解決的な学習を単なる調べ学習に終わらせないよう、実践的・体験的な学習活動を組み込み、くり返し行うことが大切である。問題解決能力が育成されることにより、実生活の場面でも問題意識が高まる。

(3) 実感の伴う理解につなげるために

実感を伴う理解については小学校学習指導要領解説家庭編、中学校学習指導要領解説技術・家庭編の中で言語活動の充実と関連づけて解説されている。家庭、技術・家庭科においては、生活に関連の深い様々な言葉が生活の中で生きた言葉となるように配慮しなければならない。本研究においても、様々な言葉が実感を伴った明確な概念となるような、言葉の充実のための学習指導を工夫したいと考える。実感を伴う理解ができることにより、さらに学習意欲が喚起され、生活をよりよくしようとする能力と態度がはぐくまれることと考える。

6 検証授業の実際と考察

(1) 検証授業の目的

「生活をよりよくしようとする能力と態度をはぐくむ」学習指導は、学習意欲を喚起し、自分の生活をよりよくしようとする思いを引き出すことが必要だと考え、2つの予備検証授業を試みた。小学校と中学校でイメージマップ法を用いて「家庭って何？」という同じ題材で授業を行った。学習後のワークシートの記述や感想からは、自分のこれからの家庭生活に対する前向きな姿勢や意欲が多く見られた。この予備検証授業により、自分の家庭生活を見つめる題材の設定や、イメージマップ法を用いた授業展開は、自分の家庭生活をよりよくしようとする思いを引き出し、学習意欲を喚起するための動機付けとなることがわかった。

以後の検証では、子どもたちが「自分の生活をよりよくしよう」とするために、なぜ、その学習をするのか、どんな変化が期待できるのかなど、子どもたちが学習の意義や必要性を実感として理解できるように授業を展開していきたいと考えた。

(2) 検証1 小学校家庭科

①検証対象 5年A組 男子17名、女子16名、計33名

題材名	「私が作る朝食 ～いためる～」
時間数	8時間
検証の視点	①実践的・体験的な学習活動の充実 ②問題解決的な学習の充実

②子どもたちの実態

5年生になった子どもたちに、家庭科の授業で「家庭って何？」と問いかけると、「家族」「仕事」「命」「助け合う」などのたくさんの言葉が出された。これらを模造紙にイメージマップとしてまとめ、クラス全体で「家庭」や「家庭科」について考えることができた。家庭から広がった言葉から家庭の大切さに気づいたり、家庭の中にはいろいろな仕事があることに気づいたりすることができ、「自分でもできるだけのことをしたい」「役に立ちたい」という気持ちが強くなったようであった。

③題材構想

本題材では、なぜ、家庭科の授業で自分の身近な家庭生活をよりよくしようとする学習をするのか、

どんな変化が期待できるのかなど、学習の意義や必要性を実感として理解するために、自分の朝食の食事調べを行い、自分の食生活の課題をもつことから学習を立ち上げることにした。健康的な生活のために、食品の栄養的な特徴やとり方、食事の大切さを理解した上で、自分の家族のことを考えながら「いためる」調理に挑戦する。「いためる」とはフライパンなどで油を使い、かき混ぜながら加熱する調理操作である。今回は、自分の家の工夫を調べたり、友達と調理方法の情報交換をしたりすることによって、調理の目的によっていためる時間や火力などに違いがあることに気づくようにしていきたい。また、学習したことを生かして家庭実践することを大切にしたいと考えている。実践報告会を行い、実践した自分の感想や家族の感想を伝え合うことで、自分がいためる調理をしたことの達成感を味わうとともに、家族とのかかわりを深め、家族の一員であることを、より一層自覚できるのではないかと考えた。

④題材の評価規準

家庭生活への 関心・意欲・態度	生活を創意工夫する 能力	生活の技能	家庭生活についての 知識・理解
・自分と家族の食生活をふり返り、家族とかわって、よりよい食べ方を考えようとしている。	・自分や家族の健康や好みなどを考えた調理を自分なりに工夫している。	・調理に必要な材料の分量や手順を考えて計画を立て、安全や衛生に気をつけながらいためる調理ができる。	・食品の栄養的な特徴を知り、食品の組み合わせを考えて食べる大切さを理解している。 ・材料に応じたいため方やいためる調理のよさを理解している。

⑤学習指導の工夫および具体的な手立てと考察 *p. 104 右下<資料>：表1参照

ア) 実践的・体験的な学習活動の充実

<探究・習得・活用の授業展開> 意図的・効果的な題材構成と学習指導の工夫

- 【探究的な学習活動】・・・「自分はどんな食事のとり方をしていくのかな」
- 【知識や技能の習得】・・・「学校栄養職員さんに栄養の秘密を聞いてみよう」
「わが家にいためる料理のコツを聞いてみよう」
「野菜をいためて調理してみよう」
- 【知識や技能の活用】・・・「家族のために野菜をいためる料理をつくろう」

家庭、技術・家庭科では、教科目標の中に、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能（技術）の習得と、その知識及び技能（技術）を活用しながら生活を工夫し創造する問題解決的な探究の力の育成が、ねらいとして示されている。知識及び技能（技術）の確かな「習得」が「活用」や「探究」の土台となり、「活用」「探究」することで「習得」への意欲が高まる⁵⁾。授業では、子どもたちの家庭生活にかかわりのある題材を通して、「習得」「活用」「探究」させる学習を1時間の授業や題材の指導計画の中にどのように意図的・効果的に組み入れていくのか、指導者の学習指導の工夫が必要であると考えた。本研究会議では生活をよりよくしようとするを、子どもたちが「自分の生活の課題に気づき、解決のために進んで実践しようとする」と考えた。この小学校の検証授業では、題材のはじめに自分の食生活を振り返る「探究的な学習」を行い、そこから一人一人に自分の課題をつ

⁵⁾ 内野紀子編著『学習指導要領の解説と展開 家庭編』教育出版 p. 62 2008年

かませる。そして家族や友達とのかかわりを通し、学び合いや調理実習などの実践的・体験的な学習活動をくり返し展開していくことで、題材全体を通して「生活をよりよくしようとする能力と態度」をはぐくむ。

【考察】 生活をよりよくしようとする能力と態度をはぐくむために、題材全体の展開を通して実践を行った。自分の朝食調べを行って学習を立ち上げ、学習のまとめである実践報告会まで、研究のモデル図(図1)にそって学習の題材を展開することができた。探究・習得し活用させる今回の題材全体の展開からは、子どもたちが授業ごとに学びを重ねながら、生活をよりよくしようとする姿が育っていく様子が検証できた(表1)。例えば、家庭科で学習したことを活用して家庭実践をする場面では、家族のためにおいしい料理を食べてもらおうと、学校での調理実習「いためる調理にチャレンジ！」での反省や経験を生かしていることがわかった。このことから、「生活をよりよくしようとする能力と態度をはぐくむ」ために題材全体の展開を通した学習指導は有効であったと考える。

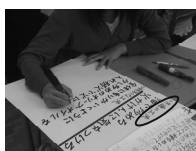
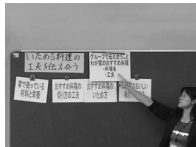
イ) 問題解決的な学習の充実

<子どもたちが思考・判断する学習場面の設定>

将来にわたって変化し続ける社会に主体的に対応していくためには、生活を営む上で生じる課題に対して、自分なりの判断をして課題を解決する能力(問題解決能力)をもつことが必要だとされている。「私が作る朝食～いためる～」の題材では、いためる調理の実習を行う前に、自分の家族に嗜好を聞くなど、よりよい朝食(健康でおいしい料理)にするための工夫を課題として考えさせた。実際の調理実習の場面では、ここでの工夫をもとに基礎的・基本的な調理の技能を身に付けさせていく。

表1 小学校：題材の指導計画と学習指導の工夫及具体的な手立て
題材「私が作る朝食」(研究との関連と子どもの姿)

学習の流れ (8時間)	(◇) 育てたい能力や (◎) 態度	(◆) 検証の視点と (・) 具体的な手立て	(☆) 生活をよりよくしようとする 子どもの姿 (ワークシートや発言から)
1. 自分の朝食を調べてみよう (2時間) ・自分の朝食を振り返り、気づいたことや問題点を話し合い、「なぜ食べるのか」について考える。 ・食品の栄養的な特徴やおいしく食べる工夫を学校栄養職員さんから話を聞き、自分の課題をもつ。	◎自分の朝食を振り返り、よりよい食べ方を考えようとする。 (関心・意欲・態度) ◇食品に含まれている成分が3つのグループに分けられていることを知り、食品の組み合わせを考えて食べる大切さが理解できる。 (知識・理解)	実践的・体験的な学習活動の充実 ◆ わが家ウォッチング ・どんな朝食を食べているのかを調べることで、毎日の食事について関心をもたせる。 ・食品の種類を調べ、自分の食事のとり方について気づかせる。 ◆ ゲストティチャーとの授業 ・学校栄養職員さんに食品の栄養素のはたらきや、食品を組み合わせて食べるための工夫について、具体的に詳しい話をしてもらう。 (具体的な話を聞かせる) 問題解決的な学習の充実 ◆ 課題の設定 (学習した知識の活用) ・課題の視点をはっきりさせるために、ポイントを示しておく。「材料と栄養、味付けの工夫、切り方の工夫、炒め方」	☆ごはんやパンは食べているけど、朝は忙しいから、野菜やおかずの料理が少ない。 ☆ほぼ毎日ウィンナーと目玉焼きが出てきた。たまに朝パンを食べることがあるけど、ごはんを食べることが多いことに気づいた。 ☆どうしたら、野菜をおいしく食べられるのだろう。学校栄養職員さんに聞いてみよう。 ☆学校栄養職員さんの話から、食べ物3つに分けられたり、野菜は煮たり、焼いたりすると吸収がよくなり、たくさん食べられることがわかった。 ☆お母さんの料理を作ってみよう。 ☆お母さんの料理を作ってみよう。だから、いためる調理の味付けの工夫を調べよう。
2. いためる裏身！わが家の工夫 (2時間) ・自分の課題を解決するために、食品の栄養的な特徴やおいしく食べるための工夫、いためる調理方法について調べる。 ・わが家のおすすめの料理と調理の工夫をグループで伝え合い、まとめる。	◇食品の栄養的な特徴やおいしく食べるための工夫、いためる調理方法について調べる。 (創意工夫) ◇調べてわかったことを整理して、分かりやすくまとめることができる。 (知識・理解)	実践的・体験的な学習活動の充実 ◆ わが家ウォッチング ・わが家の調理の工夫を聞いてみることで、課題追究のためのヒントをつかませる。 ◆ 学び合いの場の設定 ・課題が同じの同士で、調べたことを班で意見交換したり、全体で発表したりすることで、友達から家の工夫やいためる調理の情報を得るようにさせる。 『材料と栄養』 『味付けの工夫』 『切り方の工夫』 『炒め方』 『材料と栄養』 ◆ 図表のまとめ ・課題別に意見交換した中から共通の工夫と特別な工夫を整理して図表にまとめさせ課題についての理解を深めさせる。 ・まとめ方のポイントについて説明し、使用させる教材や用具などに配慮する。 問題解決的な学習の充実 ◆ 課題の設定 (学習した知識の活用) ・学習で得た知識を活用しよりよい朝食(健康でおいしい料理)にするための工夫を考えたり、家族の嗜好を聞いて課題を考えるようにさせる。	☆フライパンは温めてから油を入れる。 ☆火加減に気をつける ☆調味料の入れ方に気をつける ☆小さく切ったにんにくを油でいため、香りを出す。こげずいから最初にためる。 ☆火が通りやすいように一口サイズに切る。かたい野菜からいためる。 <共通な工夫> ・油でいためる ・火加減に気をつける ・強火できついたらためる ・いためすぎない ・火が通りやすいものは大きめに切る ・火が通りにくいものは小さめに切る <特別な工夫> ・固い材料からいためる ・時間がかかるものから入れる ・苦手が野菜は小さめに切る ・ピーマンを2種類使って色合いを工夫する ☆お母さんが朝ごはんに出してくれるおかずがおいしいから、ほうれん草のベーコンいためを作ろう。 ☆野菜の切り方を工夫して、短冊切りにしてみよう。
3. いためる調理にチャレンジ！ (3時間) ・調理に必要な材料や手順を考えていためる調理を立てる。(1時間) ・調理用具を安全に使ってペアでいためる調理をする。(2時間)	◇自分の家族の健康や好み考えた料理を自分なりに工夫することができる。 (創意工夫) ◇安全に気をつけながら、材料や目的に応じていためる調理をすることができる。 (生活の技能)	実践的・体験的な学習活動の充実 ◆ わが家ウォッチング ・家族の健康のために、どんなことを考えて食事は作られているのかを知り、自分の調理に必要な食品(材料)は何か考えさせる。 実践的・体験的な学習活動の充実 ◆ ペアによる調理実習 ・互いの調理を見合うことで、調理の目的によっていためる時間や火力などに違いがあることに気づかせる。 ・調理実習のポイントについて説明し、安全に気をくばりながら、調理実習を行わせる。	☆カレー風味の野菜いためを作って家族にたべさせた。 ☆野菜をいっぱいつかって、ダイエット中のママにもおいしくやせる料理にした。 ☆おいしかったけどにんじんが少しかたかった。今度家で作る時は今日できなかったところを家でがんばる。 ☆カレー粉をもう少し入れればよかった。 ☆すぐこげちゃった。タイミングがむずかかった。火をもう少し弱くすればよかった。



＜わかったことを図や表にまとめる活動＞ わが家の調理の工夫を調べ、課題が同じもの同士で意見交換をする場面を設定した。その際、課題別に意見交換した中から「共通の工夫」「特別な工夫」を整理して図表にまとめさせ、課題についての理解を深めさせるようにした。

<p>4. 実践報告会をしよう (1時間)</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の実践を報告したり、友達の実践を聞いたりする報告会をする。 	<p>◎調理実習と家庭実践を振り返り、友達との感想交流から、次の実践へつなげようとする。(関心・意欲・態度)</p>	<p>実践的・体験的な学習活動の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆家庭実践 <ul style="list-style-type: none"> 家庭科で学習したことを生かして、自分の家族にいためる料理を作ることにより、家族とのかかわりを深め、家族の一員であることの自覚をもたせる。 ◆学びあいの場の設定 <ul style="list-style-type: none"> 自分の感想や家族の感想を伝え合い、学習への達成感や次の意欲を引き出す。 学習全体を振り返り、自分の学びの成長が実感できるようにさせる。(学習の意義や学びの必要性への実感をもたせる) 	<p>☆最初は、火の強さや味付けが分からなかったけど、1回1回ダメだった所を気をつけて、火の強さの調節などがうまくできるようになりました。</p> <p>☆自分が作ったものを家族がおいしうって言ってくれてうれしかったです。家族のために、これからはもっといいためものができるようになって作ってあげたいです。</p>
---	--	--	--

＜実践した感想や家族からの想いを伝え合う活動＞

実生活の場面で生かされる、「生活をよりよくしようとする能力と態度」をはぐくむためには、家族や人とのかかわりの中での励ましや認め合いが必要だと考える。家庭実践報告会では、学び合いにより、自己の達成感や学びの成長を実感できるような学習活動にしたい。

【考察】 子どもたちは自分の「朝食調べ」から、忙しいことや朝食に野菜が少ないことなどを知った。そこで、「わが家のおすすめ料理を調べる」家庭ウォッチングを行い、学習指導の工夫の具体的な手立てとした。家族にインタビューをしたり、調理の様子を見てみたりすることで、炒めることに興味をもつことができた。また、わが家の工夫から、いためる「調理のポイント」に気づかせるため、課題別に共通点を見つけ出させた。グループで話し合った結果、それぞれのわが家の工夫の中に「共通な工夫」と各家庭の「特別な工夫」があることに気づいた。この活動での共通な工夫の「気づき」は、後の「いためる調理にチャレンジ！」を行う時の大切なポイントになった。家庭実践報告会からは、学校での学習を発展させていためる調理に挑戦したり、調理実習でうまく出来なかった調理の課題にもう一度取り組んだりしたことわかった。このことから、家庭科での問題解決的な学習を単なる調べ学習に終わらせないよう、家庭の「ひと・もの・こと」とのかかわりを強調した実践的・体験的な学習活動を組み込む意義は大きいといえる。自分の家庭を見つめ課題を設定し、問題解決的な学習を充実させることで、生活をよりよくしようとする子どもの姿を数多く見る事ができた。(p.104~105 表1)

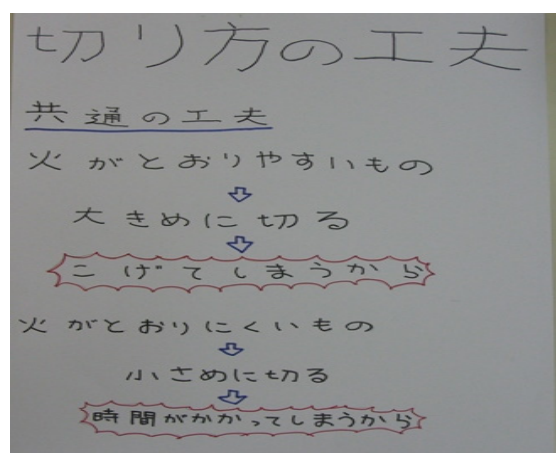


図2 課題を見つける

(3) 検証2 中学校：技術・家庭科（家庭分野）

①**検証対象** 1年A組 男子20名、女子16名、計36名

題材名	「自分の成長と家族や家庭生活とのかかわり」
時間数	8時間
検証の視点	①実践的・体験的な学習活動の充実

②**子どもたちの実態**

自分の家庭生活を見つめるために行った「家庭って何？」のイメージマップ作りから、子どもたちは「家庭」からどんなことばをイメージしているのか、一人一人のワークシートからそのことばの数を取り上げ、カテゴリーを用いてことばを分類してみた。その結果、子どもたちは、自分の家庭から

イメージされることばを「もの」>「場所」>「こと＝生活の行為」>「ひと」>「気持ち」（以下省略）の順に多く記述していた。家族などの「人」に関することばや人とのかかわりなどから築かれる「気持ち」や感情に関する記述の少ないことがわかった。このことから、子どもたちは自分の家庭生活を「もの」やことがらを主として断片的にとらえる傾向が強いのではないかと推察した。

③題材構想

これまでの子どもたちの実態から、技術・家庭科の学習指導を通し「家族とのかかわり」を考えさせていかなければならないことを実感し、これまでの学習指導に工夫や改善が必要であると考えた。幼児期の成長を学習することは、自分の成長を振り返り、自分と家族のかかわりについて見つめ直すことにつながる。小学校での「家庭って何？」の学習をさらに定着させるためにも、中学校でも、自分の生活を見つめ、家族や人とかかわることから自己有用感や自己肯定感をもたせたい。小学校での学習を基盤にし、個々のイメージマップ作りからグループ、そして、クラス全体への学習へと展開していく。これにより自分で考えたことや他者が考えていることを共有し、互いを認め合いながら、より客観的に「家庭」をとらえることができると考えた。この学習を通して、これからはじまる技術・家庭科の学習への見通しをもつとともに、自分の生活が家族や周囲の人々に支えられていることに気づき、他者との共生やよりよい家族関係について考え、授業の学びを実生活で生かそうとする態度を育てたい。

④題材の評価規準

題材の評価規準			
生活や技術への 関心・意欲・態度	生活を工夫し 創造する能力	生活の技能	生活や技能についての 知識・理解
自分の成長と家族や家庭生活とのかかわりについて、関心をもって学習活動に取り組んでいる。	自分の成長と家族と家族関係について、課題を見付け、その解決を目指して工夫している。	家庭や家族の基本的な機能や家庭生活とひと・こと・ものとのかかわりにて調べたり、発表したりすることができる。	これまでの自分の成長と家族や家庭生活とのかかわりについて理解している。 今後の学習の見通しを理解している。

⑤学習指導の工夫および具体的な手立てと考察 *p. 107 右下<資料>：表2参照

題材全体の指導計画と学習指導の工夫及び具体的手立てについての見取りは、学級全体の把握と共に着目生徒Aさんの変容を中心に研究との関連を表2にまとめた。担任の先生からの聞き取りにより、着目生徒Aさんには次のような実態があることがわかった。

<着目生徒Aさん> 担任からの聞き取りより

Aさんは授業では明るく活発な様子で、まわりの友達とのコミュニケーションも多く見られる。しかし、その反面、家庭では反抗期を迎え母親に反抗するなど、保護者との関係が難しくなっている様子が見られる。

そこで、この学習がAさん自身にどのように受け止められていくのか、授業の様子やワークシートの記述内容から個人の変容も追ってみることにした。

ア) 実践的・体験的な学習活動の充実

<これまでの自分の成長を振り返らせる学習活動>

中学生版「イメージマップ作り」

これまでも「家族と家庭生活」の学習では、自分の家庭を見つめ成長を振り返る学習活動は行われてきた。しかし個人だけの振り返りにとどまり、全体で共有する活動があまりなかった。そこで、小学校でも行われている「家庭って何？」のイメージマップ作りを協同で作業に取り組むワークショップにアレンジして実践する。この協同での学習により、家庭に対する様々な意見交換をさせていきたい。そしてこの学習活動から、「家庭」には多様な見方や価値観があることに気づかせたいと考えた。家庭とは何かを考えさせることで、これまでの家族とのかかわりを見つめ直し、家庭生活への認識を深めさせたい。

【考察】 このようなことから、学習の立ち上げにガイダンスを行い、イメージマップづくりを行った。協同で作業に取り組むワークショップでは、自分の考えをもち、家庭について意見交換をすることができた。Aさんは、学習のはじめに家庭に対するイメージを表2のように、「もの」や「こと」を多くあげており、「ひと」に対する言葉は「親」とだけ記述していた。しかし、班でイメージマップ作りを行った後、自分の家庭生活を振り返って気づいたことでは、反抗している自分のことやお母さんに似てきている自分をあげ、ここまで一人では生きてこられなかったと素直な気持ちを記述していることがわかった。その他の子どもたちの感想からも、ふだん意識して生活することが少ない家庭のとらえ方に変化があったとの記述が多く見られた。この協同で作業に取り組む「イメージマップ

表2 中学校：題材の指導計画と学習指導の工夫及具体的な手立て
題材「自分の成長と家族や家庭生活とのかかわり」

(研究との関連と子どもの姿)

学習の流れ (8時間)	(◇) 育てたい能力 や (◎) 態度	(◆) 検証の視点と (・) 具体的な手立て	生活をよりよくしようとする 子どもの姿 (ワークシートから)
<p>1. 中学生にとっての家庭について考えてみよう (1時間)</p> <p>・これらの家庭分野の学習に見通しをもつ。</p> <p>・中学生の時期にある自分と家庭生活とのかかわりについて考える。</p>	<p>◎家庭分野の学習を自分の成長やこれからの家庭生活に生かしていることとする。 (関心・意欲・態度)</p> <p>◎これまでの自分の成長や家族とのかかわりについて関心をもち深く考えようとする。 (関心・意欲・態度)</p>	<p>実践的・体験的な学習活動の充実</p> <p>◆家庭科学習ガイダンス</p> <p>・これまでの家庭生活や小学校家庭科の学習を振り返ったり、家庭分野の学習の概要について触れたりしながら、3年間の学習の見直しをもたせ、学習への意欲を高める。</p> <p>・家庭分野の学習が生活の自立や家族との家庭生活を営む力につながることに気づかせる。</p>	<p>*着目生徒 Aさんの姿を通して</p> <p><Aさんの学習前の家庭のイメージ></p> <p>テレビ、誕生日、バドミントン、自分の部屋、机、親、ケンカ、ベッド、ごはん、おでかけ、犬、勉強、会話</p> <p><Aさんの実態①></p> <p>年が上になっていくにつれて反抗している。ここまで一人じや生きてこれなかった。だんだん母さんの顔に似てきている (笑)</p>
<p>2. 「家庭」のイメージマップを作ってみよう (1時間)</p> <p>・友達と意見交換や、イメージマップ作りを通して、家庭や家族とのかかわり方について考える。</p>	<p>◎友達と意見交換から、これからの自分の家族とのかかわりに関心をもつことができる。 (関心・意欲・態度)</p> <p>◇家庭生活がさまざまなひと・こと・ものとながっていることが理解できる。 (知識・理解)</p>	<p>実践的・体験的な学習活動の充実</p> <p>◆学びあいの場の設定</p> <p>◆参加体験型学習 「イメージマップ作り」協同作業の意見交換を通して、「家庭」にはいろいろな見方や価値観があることに気づかせる。</p> <p>・家庭とは何かを考えさせることで、これまでの家族とのかかわりを見つめなおし、家庭生活への認識を深めさせる。</p>	<p><Aさんの実態②></p> <p>今まで自分が産まれてきて、世話によくした家族には本当に感謝しています。親には悪口やぼう力をしてしまっただからこれからは、親の言うことを聞いて「生んでもらったからにはやっぱりな大人になりたいです。</p> <p>☆自分と違う意見や同じ意見がたくさんあって、「家庭ってこういうコトなんだ」という意見も出て家族について深く考えることができました。</p> <p>☆あたり前だと感じていたことを初めて、大切なんだと感じた。このマップ作りでは、いろんな発見をした。</p>
<p>3. 自分の成長を振り返ってみよう (2時間)</p> <p>・家族からの話や自分の思い出を伝え合い、これまでの家族とのかかわりを考える。 (1時間)</p> <p>・これからの自分と家族の生活をよりよくするための方法(かかわり)を考える。(1時間)</p>	<p>◇自分の成長や生活はたくさんの人に支えられていることを理解できる。 (知識・理解)</p> <p>◎互いの立場を理解し、家族の一員として協力して家庭生活にかかわっていくこととする。 (関心・意欲・態度)</p>  <p>◇家庭生活での自分の役割を認識し、家族関係をよりよくする方法(かかわり)を考えることができる。 (工夫創造)</p>	<p>実践的・体験的な学習活動の充実</p> <p>◆情報収集</p> <p>・家族からの聞き取りや、小さい頃の出来事などからこれまでの自分の成長を振り返らせ、実感をもたせる。</p> <p>実践的・体験的な学習活動の充実</p> <p>◆学びあいの場の設定</p> <p>・友達の小さい頃のエピソードを開き、自分の経験や体験との共通点や違いに気づくなど、他者(や自己)に対する理解を深めさせる。</p> <p>◆視察覚悟村の活用 「明治安田生命CM」</p> <p>・VTRを流し家族のつながりをより深く感じられるようにする。</p> <p>・わが子に対する親の思いや頼りに気づかせ、これまでの自分の成長は家族の愛情に支えられていることを実感として理解させる。</p> <p>・家族の互いの立場や役割を理解し、協力して家族関係をよりよくすることの大切さに気づかせる。</p> <p>・自分のこととして考えられるよう、家族や周りの人たちに支えられて生活していることに気づかせ、自分のできることに気づかせる。</p>	<p><Aさんの実態③></p> <p>みんな大切な思い出の品をみつめてきたけど、全てに深い意味があったり大事な思い出だと思いません。自分の思い出の品は海パンなんだけど、あれは友達に悪いことをしておかれたり、ほめられたり、すごい思い出があって話しました。</p> <p>☆みんないろいろ思い出があって、「今」があるって事が好きだった。すごくリアルな話があってびっくりした話もあった。</p> <p>☆私たちの成長と家族はいつもつながっているんだなと思いました。私たちは家族に見守られて成長している！これからも、この思い出を大切にしていきたいです。</p> <p><Aさんの実態④></p> <p>自分が思う家族はかけがえのない存在です。もし自分がケンカしたり傷ついたりした時は、家族に励まされ立ち直るんだと思います。きょうたいとはケンカもするけど、ゆずり合ったりかえれば、ケンカがおこらないと思うのでずっと仲良くしたいです。これまでこれたのも自分を支えてくれる家族がいたからこそここまでこれたんだと思います。これからもずっと家族と仲良く大切に守ってきたいと思います。</p> <p>☆今まで、「だから何？」って思ったりしてたけど、今回ちゃんと親の大切さを知りました。これからは、今までの感謝も含めて、自分にできる事をどんどんやりたいと思います。</p>
<p>4. 幼児の世界をのぞいてみよう (2時間)</p> <p>・幼児の観察を通し、幼児の心身の発達の特徴を知る。 (1時間)</p> <p>・幼児の「遊び」を体験し、遊びの意義を考える。 (1時間)</p>	<p>◇幼児の生活や心身の発達の特徴について理解できる。 (知識・理解)</p> <p>◇幼児の発達にとって遊びが重要であることを理解できる。 (知識・理解)</p>	<p>実践的・体験的な学習活動の充実</p> <p>◆視察覚悟村の活用</p> <p>・VTRから幼児の保育園での生活の様子や、年齢による発達などの違いに気づかせる。</p> <p>◆幼児の「遊び」体験</p> <p>・さまざまな遊びを体験しながら、幼児にとっての遊びの意義を考えさせる。</p> <p>・幼児の遊びは、身体の発育や運動機能、言語情報、社会性の発達に大きな役割を果たしていることを理解させる。</p>	<p>(今後の実践)</p>

作り」からは、今まで押し付けがちな「家庭や家族」のあり方を問う学習にはない、子どもたち自身の気づきや価値の発見を引き出すことができたのではないかと考える。

<自分の成長を見つめ、家族とのこれからの生活を考えさせる場の設定>

<p>5. 子どもの育つ環境と家族の役割 (2時間)</p> <p>・幼児の成長と家族の役割について考える。(1時間)</p> <p>・学習をふりかえり、自分の考えを伝え合う。(1時間)</p>	<p>◇幼児の発達を支えている家族の役割について、理解できる。(知識・理解)</p> <p>◎自分の生活や事例をもとに、家族の立場や役割を理解しようとする。(関心・意欲・態度)</p> <p>◇これまでの学習をふりかえり家族や家庭の機能について考え、家庭や家族の重要性を理解できる。(知識・理解)</p>	<p style="text-align: center;">実践的・体験的な学習活動の充実</p> <p>◆情報収集、視聴覚教材等の活用</p> <p>・家族から聞き取りやVTRの視聴から気づいたことを発表し、幼児期に身に付けた生活習慣が現在の自分の生活にも役立っていることに気づかせる。</p> <p>◆学び合いの場の設定</p> <p>・これまでの自分の生活を振り返り、自分の生活や家族に対する意識の変容を引き出す。</p> <p>・学びに役立つ成長を実感させ、次の学習への意欲へつなげる。</p>	<p>(今後の実践)</p>
--	--	---	----------------

【家族や身近な「ひと・こと・もの」と向き合い、自分の成長を知る場の設定】

中学生の時期は、思春期や自立心の芽生えもあり親が煩わしいと感じがちなる部分も見られる。この精神的な成長の時期にもう一度「自分の成長を振り返る」学習を設定し、家族とのかかわりをもたせる場をつくりたいと考えた。家族の話や大切にしている「こと・もの」などから、自分の成長を知ることで、これまでの自分の成長にはたくさんの人の支えがあることに気づかせていきたい。

【自分のことばで成長を伝え合う学習活動】

自分の成長を話したり、友達の成長のエピソードを聞いたりすることから、自分の経験や体験との共通点や違いに気づかせ、自己への認識と他者への理解を深めさせたいと考え、成長の喜びを共有する学習の場の設定をした。

【学習活動を充実させる教材・資料の活用】

- ・他教科等の資料の活用・・・「心のノート」
- ・視聴覚教材の利用・・・「明治安田生命保険会社 CM」
- ・成長を実感できる「こと・もの」・・・写真、品物、具体的な思い出など

家族とのかかわりや自分の成長を振り返る活動が十分でない場合も考え、学習活動を充実させるために教材や資料などを活用していきたい。教材や資料の効果的な活用により、生徒の心情面にはたらきかけ、自分と家族のこれからの生活をよりよくしようとする思いを引き出すことで、育てたい態度の育成をめざしていく。

【考察】 自分の言葉で成長を「伝え合う」場面では、はにかみながらも一生懸命自分の言葉で成長を語る姿がどの子どもたちにも見られた。このことから、身近な「ひと・こと・もの」を介して家族と向き合い、互いに「成長を語り合った姿」が推察された。また、大病をした友達の話を聞き、その成長に驚きや喜びを感じていた。励ましの感想などから、自分だけでなく、他者に対する理解も深められたと考える。今回の検証授業では、学習指導を充実させるためにテレビ CM⁶⁾ を教材として活用した。視聴後、この教材をもとにこれからの自分と家族との生活を考えさせた。

視聴が始まった直後は、聞き覚えのある音楽に反応し唄を口ずさむ場面もあったが、次第にCMの内容に引き込まれていくのがわかった。視聴後の子どもの中には、感動の涙を流している姿も見られた。その授業後の感想からは、「自分はいないほうがいいんだと思っていたが、自分の存在の意味をもう一度考えた」という子どもや、「兄が将来の夢について語るようになって、自分自身も介護士になりたいと思った」など、家族とのかかわりを通して将来の夢や生き方への意思をもつことができた子どもたちの姿を見取ることができた。Aさんも資料2の変容④の感想のように、自分と家族とのかかわりを振り返り、これからの家族との生活を考えている。気持ちの記述も具体的になり、記述の量も増えてきていることがわかった。

⁶⁾ 企業広告 明治安田生命保険株式会社 テレビCM「たった一つの贈り物」より

これらの学習指導の工夫や具体的な手立ての検証から、「自分の成長や家族と家庭とのかかわり」について学習を行う際には、身近にある生活の中から教材や（資料から）題材を開発したり、他教科等の資料の活用場面を考えたりする必要もあることを感じた。実践的・体験的な学習活動を充実させることで、自分の家庭生活を見つめ直し、家族関係をよりよくしていこうとする子どもたちの能力と態度が育つ姿が見られた。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究から見てきたこと

(1) 生活をよりよくしようとする能力や態度の育ち

【小学生の姿から】

小学校の授業では、学習題材全体を通して「生活をよりよくしようとする能力と態度」を育む題材を構成できた。このことにより、育てたい能力と態度を育てるためには、どのような学習指導の工夫を行っていけばよいのか、具体的な手立てについて手がかりをつかむことができたと考える。実践的・体験的な学習や問題解決的な学習を日々の学習指導の中できり返し行っていくことが、子どもたちが自分の家庭生活の場で生かし実践しようとする確かな知識や技能の習得には大切であることが実証できた。



図3 小学校家庭実践

【中学生の姿から】
 検証授業から、中学生はどんなことをより強く認識し考えていたのか、ワークシートの振り返りでランキング法⁷⁾を用いて分析した(図4)。その結果、検証場面の学習では、「自分にとって家族はとても大切」だと考えたことを一番にあげていることがわかった。これは、教材として使用したテレビCMの内容が強く印象づけられたことが一つの要因ではないかと推察する。

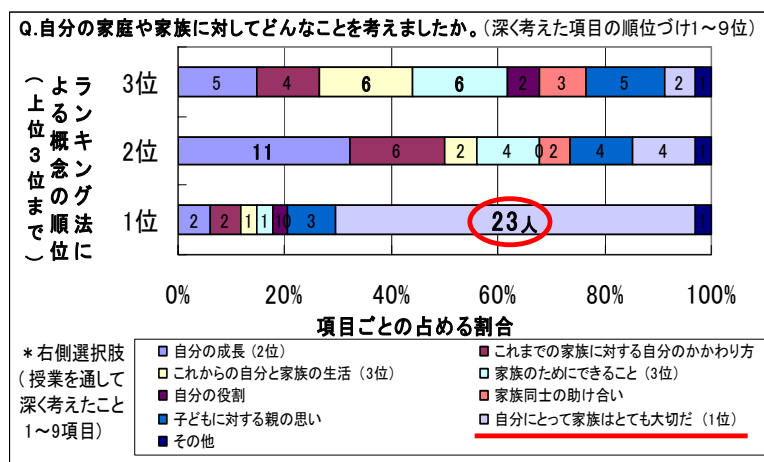


図4 授業によって家庭や家族をどのようにとらえたか

ランキングにより明らかにされた上位の概念には、「自分の成長」や「これからの自分と家族の生活」「家族のためにできること」をあげている。教師の学習指導のねらいと生徒の振り返りが一致していることから、学習指導の工夫と具体的手立ては有効であったと思われることがわかった。下位になった概念についての認識を高めるためには、別な角度から子どもたちの実感や感性に迫るなど、さらに学習指導の工夫を考えていく必要がある。

⁷⁾ ランキング法とは、参加体験型学習の学習方法の1つである。様々なテーマについて10個前後のキーワードをあげ、そのカードをダイヤモンド型に並べ、順位づけをする。個人でおこない、相互比較をすると多様な見方があることに気づく場合もあるが、集団で行い、合意形式をはかる方法として用いることもできる。

① 学習により中学生は家庭をどうとらえたのか

「自分の成長と家族や家庭生活とのかかわり」の学習が子どもたちの心情面にどのような変容があったのかを学習前と学習後で比較してみた。学習後、再度子どもたちに「家庭という言葉からどんなイメージがわきますか」と質問を投げかけた。その結果、図5のような変化がみられた。この学習後に気持ちに関する記述が増え、家庭を気持ち>こと>もの>場所>ひと（以下省略）の順にイメージしていることがわかった。

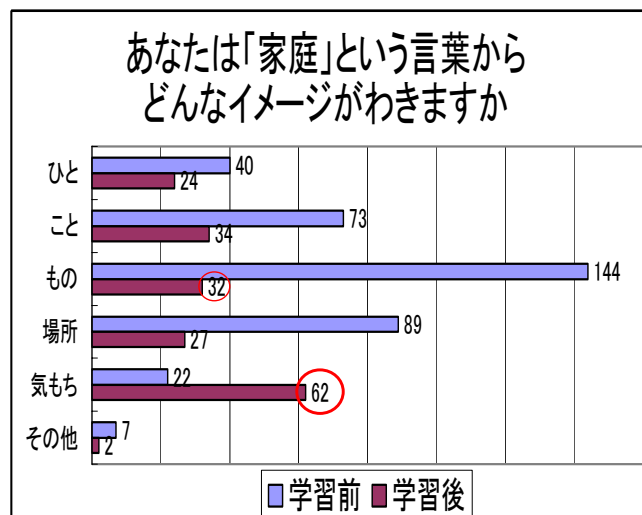


図5 中学生の家庭に対する認識の変化

② 「場所」の認識の変化

図5から、学習後の子どもたちの「場所」に対する受け止め方に変化があることがわかった。学習前には、「場所」を単語で家、風呂場、自分の部屋などと記述しているものがほとんどであったが、学習後は「いろいろと相談できる場所」「気持ちのいい場所」「自分が安心できる場所」「成長していく場」など気持ちや感情、意思を含む言葉が増えていた。記述の内容をもとに再度カテゴリーに細分化し分析をしてみたところ、家庭の「場所」を精神的な安らぎの場として受け止めている子どもたちが学習後に著しく増えているのがわかった（図6）。このことから、子どもたちはこの題材を通し「家庭とはどういう場なのか」ということを、自分のこととして具体的に考えることができるようになっていったのではないかと推察する。家庭の機能についても実感を持った認識がなされ、自分の言葉で語れるようになったと考える。

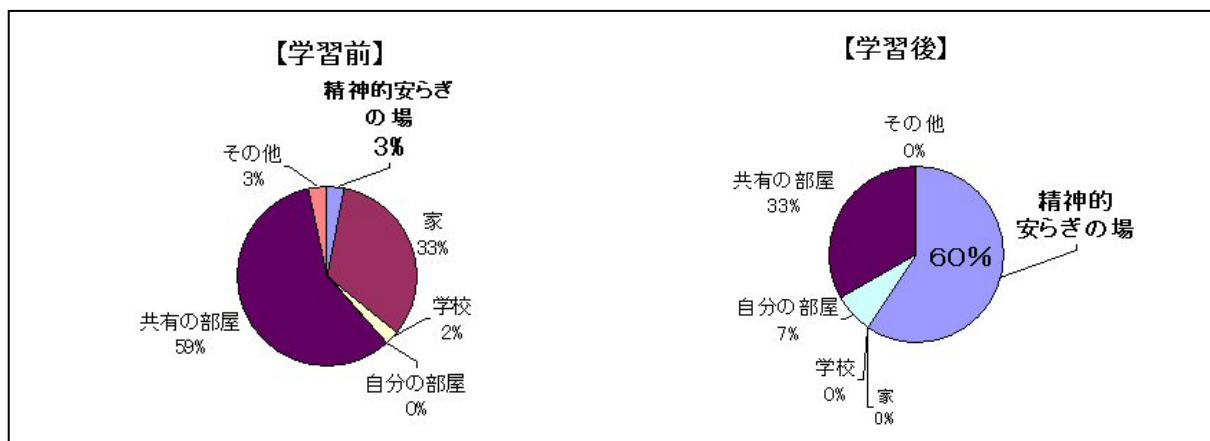


図6 「場所」の細分化による認識の変化

(2) 生活をよりよくしようとする能力と態度をはぐくむ指導方法（学習指導）

①実践的・体験的な学習活動の充実

家庭、技術・家庭科では、実生活に生きて働く力を実習や体験の活動を通して学習している。教科の学習でこの実践的・体験的な学習活動を充実させるためには、指導者が子どもたちの生活の実態を的確に把握し、家庭生活とのかかわりの中で意味ある題材を構成して、その中で子どもの体験の質を

高める工夫をしていくことが大切だと考える。質の高い実践的・体験的な学習活動とは、子どもたちにとって「できた」「わかった」などの達成感や成就感が味わえる学習である。家庭、技術・家庭科の学習を通して子どもたちをどのように育てていきたいのか、そのためにはどのような題材がよいのか、また、どのような体験がよいのか、具体的な指導観や題材観が指導者に求められる。これらを踏まえ、本研究では、学習活動を充実させるために、子どもたちの感性にふれる教材や資料を活用することを試みた。授業展開では、参加体験型学習による伝え合い、学び合いなどの学習場面を設定した。わかったことを図や表にまとめ、実際に調理を行って体験をしたり、自分の考えを伝えあったりする学習活動は、子どもたちがさまざまな角度から思考や判断し、表現する場となったと考える。このように子どもたちの五感や感性にふれる学習場面の設定や言語活動を充実させることも、実践的・体験的な学習活動の充実につながるものであると考える。

②問題解決的な学習の充実

家庭、技術・家庭科における問題解決的な学習では、将来の自分の家庭生活を営む上で生じる課題に対して、自分なりの判断をして課題を解決できる能力を身に付けていくことが求められている。将来、自分の家庭生活の中で課題を解決していくための能力をもたせるためには、実践的・体験的な学習を組み込みながら多様な学習場面を設定し、くり返し問題解決的な学習を行っていくことが大切である。家庭、技術・家庭科における問題解決的な学習が、単なる調べ学習に終わらないようにするためには、「自分の家庭生活」を軸に、実践的・体験的な学習活動を組み込み、よりよい生活のために必要な工夫を思考・判断させる学習場面を設定することが大切だと考える。

本研究では課題設定の場面で自分の生活を見つめ、家庭生活とのかかわりを改めて意識させた。これは、学校での学習を家庭生活とつなげ、生活の場で実践できるようにするためである。学習活動の中でわかったことを図や表でまとめたり、家庭実践につなげ実践を伝え合ったりする言語活動の充実も、問題解決的な学習を充実させることにつながっていくと考える。

2 今後の課題

(1) 課題のもたせ方

授業の課題作りの場面では、家庭での経験や体験の違いによって課題のとらえ方に違いが見られた。しかし、今回の研究では、「生活をよりよくしようとする能力と態度」をはぐくむために、実践的・体験的な学習活動や問題解決的な学習を通して、どのような学習指導の工夫とその具体的な手立てを考えていくかに重点がおかれたため、「課題のもたせ方」についての研究は十分ではなかった。問題解決的な学習を通して、子どもたちが学習の意義や必要性を実感できるような課題をもたせるためには、唐突に課題を見つけるのではなく、前後の学習に必然性や関連のある学習場面を設定することが重要であると考えられる。そのためには、「ゆでる」と「いためる」の調理を比較し、そこで気づいた違いから課題をもたせるなど、指導者の意図的・計画的な授業設計や学習指導の工夫が求められる。

教科の中で、問題解決的な学習は大切な学習として位置づけられており、「課題のもたせ方」を含めて問題解決的な学習であることを今後十分に考え、「くり返し」学習を設定していく必要がある。

(2) 家庭との連携

家庭、技術・家庭科で学習する知識や技能などは、学校での実践的・体験的な学習活動や問題解決的な学習の中で「できた」「わかった」だけでは定着したとはいえない。学習したことをもとに家庭生活に生かし、継続的に実践できるようにするためには、家庭との連携を図りながら学習を進めたり、家庭に向けて授業への協力を求めたりすることも有効であると考えられる。本研究でも、小学校のミシン

を使った製作活動で保護者への協力を求め、学習に参加を依頼した。そのことで、子どもたちや保護者の間にも学習を通したかかわりができた。

自分の生活が家庭と深くかかわっていることに気づかせ、生活の課題に対して最適な解決策を追究することや生活を具体的に解決することなどによって、生活をよりよくしようとする能力と態度をはぐくんでいくことが、今、家庭、技術・家庭科の学習に望まれている。

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援ご助言をくださいました講師の先生方、また所属校の校長先生をはじめ学校職員の皆様に、心より感謝申し上げます。

【参考文献】

- 鶴田敦子、朴木佳緒留編著 『現代家族学習論』朝倉書店 1996年
- 鈴木真優美「自分の思いや願いを実現できる家庭科学習をめざして」
 ー身近な問題をとらえて自らかかわり、学習を構築していく力をつけるためにー
 川崎市内地留学生研究報告 1999年
- 橋本 都 編著 『小学校新教育課程の解説 家庭』第一法規 1999年
- 河野公子・渡邊康夫編著 『中学校新教育課程の解説 技術・家庭』第一法規 1999年
- 日本家庭科教育学会北陸地区研究会 渡辺彩子、荒井紀子編著
 『主体的に生活をつくる』ー人間が育つ家庭科ー 学術図書出版者 1999年
- 日本家庭科教育学会『衣食住・家族の学びのリニューアル』
 ー家庭科カリキュラム開発の視点ー 明治図書 2004年
- 堀内かおる編著 『家庭科再発見』ー気づきから学びがはじまるー 開隆堂 2006年
- 中村祐治、堀内かおる、岡本由希子、尾崎誠 編著『これならできる授業が変わる評価の実際』
 ー「関心・意欲・態度」を育てる授業ー 開隆堂 2006年
- 中間美砂子編著『家庭科への参加アクション型志向学習の導入』大修館書店 2006年
- 家庭科教育実践講座刊行会『アバンセ家庭科教育実践講座』理論編 ニチブン 2008年
- 横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校編
 『習得・活用・探究の授業をつくる』三省堂 2008年
- 安彦忠彦監修 内野紀子編著 『小学校学習指導要領の解説と展開』教育出版 2008年
- 鶴田敦子、伊藤葉子編著 『授業力UP 家庭科の授業』日本標準 2008年

【指導助言者】

- 横浜国立大学教育人間科学部准教授 堀内かおる
- 千葉大学教育学部教授 佐藤 文子
- 川崎市小学校家庭科教育研究会会長（川崎市立大島小学校長） 庄司 順子
- 川崎市中学校教育研究会技術・家庭科部会長（川崎市立向丘中学校長） 吉田 和江
- 川崎市総合教育センター指導主事 江尻 孝美